

【公開処刑】部内恋愛禁止を破ったカップル。全裸になり羞恥罰を受ける

「これはどういうことか説明してくれるか？」
Y高校陸上部顧問の、小谷松がスマホの画像を見せながら、問い詰める。

尋ねられた2人の男女は黙っていた。
狭い部室にY高校の陸上部員が全員集められていた。

部員は3学年合わせて、23人いる。

「ちょっと遊んでただけです」

問い詰められている男の方が答えた。

2年の男子部員、高倉康介だ。

「うーん、俺が見るからに明らかにデートしてるように見えるけどなあ」

顧問の小谷松が2人に見せていたのは、ある画像だった。

それは陸上部の高倉康介と、同じ陸上部で同じ2年の女子、倉橋美里乃が映っている画像だった。

この画像を撮影したのは、同じ陸上部の生徒だった。

その陸上部の生徒が画像を顧問の、小谷松に送っていたのだ。

小谷松は50代の男の教師で長年、陸上部の顧問を務めてきている。

Y高校陸上部は部内での恋愛は禁止となっていた。

高倉康介と倉橋美里乃はそれを破っているの

ではないかということで問い詰められていた。
「倉橋はどうなんだ？」

小谷松が黙っている女子、倉橋美里乃に声をかけた。

倉橋美里乃は短距離走を専門種目としている小柄な女子だ。

無駄な贅肉が一切ない、きれいな白い足がなまめかしい。

「ただ遊んでただけです」

倉橋美里乃がうつむき加減にそう言った。

「うーん、俺が聞いた話では、2人はもう3カ月ぐらい付き合ってるということらしいんだがなあ」

小谷松が首をかしげながら言った後、話し続ける。

「確かに、この写真だけではお前らが付き合っているとまでは言えないかもしれない。でも、明らかに2人だけでこれ、ボーリング場だよな、ボーリング場には行ってるよな。これをデートじゃないと言う方が難しいように思うけどなあ」

顧問の小谷松の言葉に、高倉康介と倉橋美里乃はただうなだれていた。

部室に集められている部員たちの捉え方は様々だった。

付き合ってデートに興じていた2人のことをうらめしく思っている者もいたし、うらやましいなと思っている者もいたし、別にいいんじゃないと思っている者もいた。

「内の陸上部がなんで恋愛禁止にしてるかわ

かるか？」

小谷松が2人に尋ねる。

高倉康介と倉橋美里乃は首を横にふった。

「前にも軽くみんなに説明してたと思うけど改めて説明するわ」

そう言って、小谷松が説明を始める。

「陸上は基本的には個人競技だ。リレーとか駅伝を除けばな。でも、個人競技だからこそ、部全体としての団結力は必要だと思う。だから部内での恋愛は禁止になっているんだ。部員同士が恋愛すると、どうしても競技に集中して取り組むのとは違う雰囲気が出てきてしまう。それは本人たちがいくら注意してても、出てきてしまうものだと思う。そういう空気が出てくると、他の部員にもそれが伝染する。そうなってくると、練習の士気が下がり、練習の質も落ちてくる。その後、どうなってくるかというと、当然結果も出なくなってくる。陸上部全体に波及してくるんだ。だから、内の部活では恋愛を禁止としている。それは俺たち全員のルールだ。で、このことを踏まえて、あらためて2人に問いたいんだが、これは本当にデートではなくて、2人は付き合っていないんだな？」

狭い部室の中で、小谷松が話を終わると、一気にしんと静かになった。

全員が、2人の回答を待っていた。

「すいませんでした。付き合ってます。ごめんなさい」

ついに、高倉康介がそう話し、付き合っていることを認めた。

「ごめんなさい」

倉橋美里乃が続けて言った。

「はぁーーーーっ」

小谷松が大きなため息をついた。

「じゃあお前らはやっぱり決まりを破ってたわけだな。それだけでなく、破ってたことを最初は隠そうとしたわけだ」

小谷松がしかめっ面で言った。

「すみませんでした」

高倉康介と倉橋美里乃が同時に言った。

周りにいる陸上部員たちの反応は様々だった。緊張した空気から少し解放されて一息ついている者もいた。

認めたのだから、これでいいじゃないかと思っている部員がかなりいた一方、絶対に許せないと思っている部員も一部いた。

2人がデートしているところを撮影した者がまさにそう思っていた。

「ごめんなさいって言って、簡単に許されるようじゃ意味ないからなあ」

小谷松がそう言う。

「簡単に許したんじゃ、お前らに続いて部内で恋愛し始めるやつが現れるとも限らん。だからやっぱりそれなりの罰は受けてもらわないといけないよなあ」

部員たちにまた緊張感が漂った。

「どうする？高倉、お前、坊主にでもなるか？」

そう訊かれた高倉はすぐに返答はできなかった。

でも、なにか言い返せる立場でもなかったの

で小谷松の話を肯定するしかなかった。

「はい、わかりました」

高倉康介がそう答えると、すぐにバリカンが用意された。

そして、狭い部室の中、下に新聞紙を敷いて、男子部員がバリカンで高倉康介の髪の毛を剃り始めた。

初めから短髪の高倉康介だったので、剃り上げるのに時間はそれほどかからなかった。

剃られた髪の毛が下に落ち、頭皮の地肌がどんどん露わになってくる。

高倉康介はものの 1 分ほどで、坊主のようにきれいなさっぱりとした頭になった。

「おーー」「なんかさっぱりしたなー」

周りの部員たちからは、ちょっとした歓声が上がるくらいだった。

これは罰なわけだけれど、当の高倉康介もちよっとうれしそうですらあった。

「よーし、これで高倉はいいだろう」

剃り上がった高倉康介の頭を確認した小谷松が言った。

「で、倉橋なんだが、どうすっかなー。さすがに女子を坊主にするわけにはいかないよなあー」

小谷松が頭をひねる。

「先生っ」

1 人の男子部員が手を挙げた。

元から坊主頭をしている 3 年の富山だ。

「なんだ富山」

そう小谷松が言い、富山に発言を促す。

「ちょっと前のアイドルが恋愛がバレたとかで、

坊主になったことがあったじゃないですか。だから別に女子が坊主になってもいいんじゃないでしょうか？」

坊主の３年男子部員、富山がそう言った。

「ああ、あったな、そんなこと」

小谷松がそう言いながら、思い出している。

「でもなあ、あれはウケ狙いみたいなのこあったからなー。それに倉橋がいきなり坊主になったりしたら、学校で噂になるだろ。そうなると問題になるからなあー。それはちょっと無理だなあー」

小谷松がそう言って、富山の発言を否定した。

でも、かといって、倉橋美里乃になんの罰も与えないとなると、部員たちに示しがつかない。

立派に坊主になり罰を受けた高倉康介と、対応の差が生まれることになる。

それはそれで男女平等にも反するし、問題だろうと小谷松は思った。

女子にとって、受け入れがたいもの、恥ずかしいもの、絶対に避けたいもの。

なおかつ、表にはなりづらく、陸上部員以外には気付かれないもの。

「よし、倉橋、ここで裸になるか」

小谷松が倉橋美里乃の方に顔を上げて見て、そう言った。

部室の中が一瞬静かになり、時間が止まったようになった。

倉橋美里乃は驚いて、何も答えることができなかった。

「先生、裸ってどういうことですか？」

見かねた富山がそう尋ねた。

「どういうことって、言葉通りだよ」

小谷松が事も無げに答えて話し続ける。

「女子を坊主にするわけにはいかないから、それと同じくらい恥ずかしいこと、屈辱的なことは何かを考えたら、みんなに裸を見られることじゃないかなと思ったんだよ。陸上部の決まりを破ったんだから、陸上部の部員に裸を見られるのは耐えないといけないなとも思ったし」
理屈が通っているのかいないのかわからない
小谷松の言葉だったけど、陸上部の中で顧問の小谷松に反対意見を言える者など1人もいなかった。

「よーし、じゃあそれでいいな。じゃあさっそく倉橋、服をここで脱いでいってくれ」

小谷松がそう言うと、静かにしていた部員たちがざわざわとし始めた。

女子部員たちはそんなことはあり得ないと思っていた。

男子部員たちもあり得ないと思っていたけど、それよりも、倉橋美里乃の裸が見れるかもしれないということで、色めき立っていた。

一番色めき立っていたのは、これを言い出した顧問の小谷松本人だった。

日々、教師として、陸上部の顧問として、生徒である現役女子高校生と接している小谷松ではあるが、当然、女子生徒の裸を見たことはない。

そして、女子生徒の裸を見たいに決まっている。